

1 高野佐三郎略歴

西暦 (年号)	年齢 (数え年)	事 歴 (埼玉県立文化会館遍『高野佐三郎』を参考)
1862 (文久 2)	1	秩父郡大宮郷249番地、高野家の長男として生る。父は芳三郎、母はケイ、兄弟は唯一の姉うたあり。高野家はもと、秩父神社の境内にあり、有名な旧家で、代々秩父絹の検査役をつとむ。
1865 (慶応元)	4	祖父苗正 (みつまさ) につき小野派一刀流組太刀を学ぶ。
1866 (慶応 2)	5	小野派一刀流組太刀56本を、松平下総守忠誠公の上覧に供し、賞与として、銀子一封に「奇童」の二字を添えて下賜せらる。
1879 (明治12)	18	試合に敗れ、志を立て上京し、山岡鐵舟の門人となる。
1886 (明治19)	25	警視庁に奉職元町警察署世話係を拝命す。
1888 (明治21)	27	埼玉県警察本部備員を命ぜらる。浦和の埼玉師前に道場を建てる。
1895 (明治28)	34	武徳会総裁宮より、地方委員を拝命す。
1896 (明治29,3月)	35	埼玉県警部に任ぜられ、巡査教習所武術教授嘱託さる。
1896 (明治29,3月)	35	埼玉県師範学校武術教授を嘱託さる。
1896 (明治29,10)	35	第2回武徳祭武道大会剣道において成績抜群にて精錬証を授与さる。
1898 (明治31)	37	日本体育会埼玉常務委員を嘱託さる。
1899 (明治32)	38	東京市九段下に道場を建て、ここに移転す。浦和明信館はこれを壊し、駅前、体育ヶ原の一角に建設す。
1900 (明治33)	39	大日本武徳会埼玉支会開設委員を嘱託さる。(埼玉県委員長)
1904 (明治37)	43	大日本武徳会埼玉支部幹事を嘱託さる。
1905 (明治38)	44	剣道教士の称号を授与さる。
1908 (明治41)	47	東京高等師範学校撃剣科講師を嘱託さる。
1910 (明治43)	49	早稲田大学剣道部講師を嘱託さる。
1911 (明治44)	50	文部省、師範、中学、高女教員講習会講師を嘱託さる。
1912 (明治45,6月)	51	大日本帝国剣道形調査委員兼主任を嘱託さる。(大日本武徳会)
1912 (大正元年)	51	大日本帝国剣道形制定に対し、大浦会長から「剣道統一」の揮毫を頂き謝意を表さる。
1913 (大正 2)	52	範士の称号を授与さる。(大日本武徳会)
1915 (大正 4,3月)	54	名著『剣道』天覧の榮に浴す。
1915 (大正 4,7月)	54	東京高等師範学校剣道科主任を命ぜらる。
1916 (大正 5)	55	東京高等師範学校教授に任ぜらる。(内閣総理大臣)
1920 (大正9、10月)	59	早稲田大学主催全国中等学校優勝旗競技会審判長を命ぜられる。
1920 (大正9、10月)	59	東京高等師範学校主催全国中等学校優勝旗競技会審判長を命ぜらる。
1920 (大正9、10月)	59	福島県・新潟県・秋田県それぞれ県の中等学校優勝旗競技会審判長を嘱託さる。
1924 (大正13)	63	修道学院完成す。泰正氏 (長男) 運営す。
1929 (昭和4)	68	御大礼奉祝天覧武道大会の範士、教士の審判を仰せつかる。
1931 (昭和6)	70	第一回早稲田大学剣道部を引率して渡米す。

1933 (昭和8)	72	埼玉県出身軍人慰問兼満鉄の招聘に応じ埼玉剣士三剣12名を引率して渡満し、新京においては満州国皇帝に拝謁仰せつかり、握手を賜り、満州剣道部と対抗試合を行い、天覧を賜る。
1934 (昭和9)	73	皇太子殿下御誕生奉祝天覧武道大会審判員を仰せつかる。 日本剣道形を天覧の栄に浴す。
1938 (昭和13)	77	第二回早稲田大学剣道部を引率渡米す。
1940 (昭和15)	79	紀元二千六百年奉祝天覧武道大会大日本帝国剣道形を天覧に供す。
1945 (昭和20)	84	浦和岸町から一家秩父に疎開す。
1950 (昭和25)	89	午前十時鎌倉市極楽寺462番地で死亡す。

2 東京高等師範学校と嘉納治五郎 (1860-1938)

東京高等師範学校の母体は、1872年(明治5)文部省の学制公布にともない設立され、近代教育を担う教員の育成を目的とする「師範学校」であった。新しい教授法や教育課程の普及、教授法の開発、実験、演習などの実施を含め、全国のモデル校の立場にあった。当初はアメリカの小学校教授法を導入したモダンな学校であった。各地に官立師範学校が設立されたので名称を「東京師範学校」と変更したが時代の推移とともに中等学校教員の需要が高まるにつれ「中学師範学科」を設置。やがて小学校教員養成が各府県立によって担われることになり、東京師範学校は次第に力点を中等学校教員養成へと移行し高等師範学校となるのである。

高師初代校長は、会津戦争で勇名を馳せた当時陸軍大佐の山川浩。当時は国家の強力な支配下に在り、軍隊化方式の政策により全寮制の寄宿生活や服装にいたるまで厳しい規律が重視された。その後、第三代・第五代・第九代の校長となった嘉納は己の理想に基づいて様々な改革を断行するのである。すなわち、教育は上意下達の規制強化によってなされるものではなく、「個人の心身の力の有効活動により国家に貢献できる」(注1『気概と行動の人嘉納治五郎』筑波大学出版会、P17)という信念に基づく教育政策の実施であった。その具体的な施策は、知育・徳育・体育の三育主義の導入であり、競技をとまなう身体活動の重視と実践である。さらに、心身の鍛錬に最も有効な教材としての「柔道」を提唱する。それは、単なる一競技種目を示すものではなく、「体育法・勝負法・修身法」という、いわば「知・徳・体」の人間統合修練システムを意味する「柔道」である。

1893年、嘉納は、校長就任とともに上記の信念に基づき、他の学校に比べて低調であった運動部活動の活性化のため、大運動会の開催や柔道部などを創設したのである。外来のスポーツとのバランスを考え、特に、柔道、撃剣、弓術などを奨励し、当時実施されていた宿舎の軍隊的分団組織を廃止し、それに変わるものとして1896年に運動会(後の校友会)を組織した。その翌年からは運動会の正式な活動として各部の活動が開始されるようになった。撃剣部の活動もこの時から始まる。嘉納が三期目の校長に就任した1901年(明治34)からは、スポーツ活動が全学規模で推進され、武道教育の専門家養成システムの構築へと進んでいた。退職までの19年の間に東京高師は日本の体育・スポーツ活動の拠点校となったのである。

高野佐三郎が東京高師に赴任した1908年(明治41)当時には、「柔剣道のいずれかを履修し、春と秋に長距離を走り、夏には二週間の水泳実習を行い、秋に陸上大運動会に参加、そして校友会活動にも参加する、というのが嘉納校長時代の高等師範学校の学生であった。文科や理科という専門のいかんにかかわらず、すべての学生が参加」(注2、注1に同じ、P99)という態勢が出来上がっていた。当時の運動部には、柔道、撃剣(剣道)、弓技、器械体操、相撲、ローンテニス、フットボール、ベースボール、自転車、ボート、徒歩、遊泳、卓球、ラ式フットボール(ラグビー)などが設立されていた。

嘉納は校友会活動の必要性について次のような見解を示している。「思うに学校教育は、教場に於て教を受け、寄宿舎に於て監督指導をうけるのみでは、未だ完備せるものとは云い兼ねる。なほ学生

をして、各々自己の考を發表し其の考に基づきて行動せしめ、其の教場並に寄宿舎に於ける教育の結果の行為にあらわれたるを見て、将来の指導薫陶の方法を考え、あらゆる機会を利用して訓諭す可きことを決するに就いての、資料を得ることを務めなければならぬ。それ故、在学中学生をして各々校友会各部の仕事を担当して、其の事に当たらしむるは夫等の目的を達する為、洵に必要なことである」(注3、注1に同じ、P100-101)と述べる。学生の主体的活動に大きな期待を寄せているのである。学生の自主的活動を通じてスポーツの発展に寄与し、指導者としての資質の向上や長距離走・大運動会の実施によって促される共同精神の養成を図る当時の校友会活動は、現今の学校教育における部活動教育に通ずる先駆的な事例とみることができる。

高野は、「心身の力を最も有効に活用し自分を完1成し世のためになる」という嘉納の教育原理ともいべき考え方の枠組みのなかで剣道の近代化を推進するのである。

3 高野佐三郎(1862-1950)と東京高等師範学校

高野佐三郎が1908年に東京高等師範学校講師に着任した当时には、前述のように、嘉納によって運動会活動が組織化され柔道部や撃剣部の活動は、他大学を招いての「紅白勝負」や「対抗試合」を実施しながら活発に実施されていたのである。特に1906年には、文科兼修体操専修科の学科目に「体操及柔道又ハ撃剣」が設けられ、前回取り上げた富永堅吾や後に高野の指導書作成に関わる山本長治らが入学し、剣道部の活動は一層活気づくのである。当時の撃剣部師範は直心影流の木村敷秀(のぶひで)(1855-1924)であった。木村は、1899年(明治32)に東京高等師範学校及び附属中学校体操科の授業嘱託として採用され、同じ直心影流の下妻久徴(ひさつぐ)(1854生まれ)とともに、草創期の撃剣部を創り上げた人物である。下妻の退職後は、東京高師撃剣科嘱託に就任した高瀬忠彦が師範となったが二年後に急逝。ちょうどその頃、星野仙蔵の「体育ニ関スル建議案」が国会で可決し、中学校正課の授業科目に「撃剣及柔術」を採用するための準備が検討されていた。この後任人事で動いたのが、撃剣部活動の発展に尽力し、嘉納の校友会活動に協力していた峯岸米造(1870-1947)である。

峯岸は校友会結成と同時に撃剣部の部長となり、木村らと共に部活動を支え続けた。その峯岸について、教え子である小沢丘は「峯岸先生はご自分では剣道をなさらなかったが、高師では非常に力をもっておられ、高野先生でさえ頭が上がりなかつたようでしたね。非常な精神家、人格者でした」と評する。興味深いのは、峯岸が高師の学生の頃「警視庁の警部を退職し教育博物館に勤務していた藤田五郎に指導を仰ぐようになり、在学中は必ず毎日時間を決めて稽古に励んだ」という(注4『教育剣道を培った人々』いなほ書房、P200)。ちなみに、藤田五郎というのは、新撰組隊士の生き残り二名のうちの一人、かの斉藤一のことである。

この峯岸の推挙によって、1908年(明治41)、高瀬の後任として高野佐三郎が採用されることになったのである。剣道関係の取材を通じて多くの著作を世に出しておられる堂本昭彦氏は『高野佐三郎剣道著作集』(スキージャーナル)で高野の東京高師採用のいきさつを次のように述べている。

「東京高等師範学校校長嘉納治五郎は、さっそく同校教授^{マツ}峯岸米造(撃剣部部長)に撃剣科講師の適任者探しを命じている。峯岸は当時名のある剣道家のうちこれぞと思われる何人かをリスト・アップし、つぎにかれらを一人ずつ同校の道場に招いて生徒たちに稽古をお願いさせた。一種の実技試験である。実技試験のあと、懇談しながら面接試験もひそかに行った」というのである。さらに「高野佐三郎は、例の建議案を議会に提出した小沢愛次郎、小沢一郎とは剣道を介して親交があり、星野仙蔵は彼の高弟であった。これらの政治家の強い推せんがあったことは想像に難くない」と指摘している。(注5 注4に同じ、P20)

そのような事情で東京高師の講師となった高野は、着任と同時に木村とともに三つの改革を試みている。まずは撃剣部という名称を剣道部に変更、柔道や水泳に合わせるために剣道の階級制度を段級制度に改変。さらに、高野と木村の両師範は、各流儀を取捨しあらたな剣道形「五行形」を考案したのである。矢継ぎ早の改革であった。これは中学校の正課編入の実施を見越しての作業であり、大日

本武徳会制定形に対抗するものであったかもしれない。それまでは、学内の剣道紅白勝負の際には直心影流の法定（ほうじょう）や刃引きが実施されていたのだ。それに変わり「諸流の型を取捨し、之に真剣の場合を加味したる型を制定して本校の型となし、毎週月曜日有段者は之を稽古」したという（注6、注4に同じ、P138）。流儀に捉われない新しい視点で組み立てられた「五行の形」の制定である。

4 剣道形（剣道統一形）の制定とその意義

武道が文部省の正課として学校体育に編入されたのは、1911年（明治44）、今から112年前のことである。そこには高野佐三郎（1862～1950）の多大な尽力があった。剣道の指標となる形の制定と指導法の整備である。

剣道の近代化（客観的な原理に基づいた体系）のための課題は、数多くあった流儀を通呈する統一見解の提示であった。1886年（明治19）に警視流木太刀形が、1906年（明治39）には大日本武徳会制定剣術形（三本）が制定されたが文部省の認可するものとはならなかった。剣術が中学体育に正課編入されることを受けて流派性を超えた新たな「形」として中学校の授業に活用できるよう、1912(大正元)に「大日本帝国剣道形」が制定されることになった。高野は5人の主査の一人として東京高師の立場で活動したのである。

江戸時代後期には、竹刀と防具を使用し打突を競い合う「撃剣」（現代の地稽古・試合）が流行し多くの流派がそれを採用するようになった。当然のことながら、基礎基本は各流儀の形で習得し、その後で「撃剣」を実施していたのである。近代教育の枠組みに採用させるためには、流儀の集合体である「撃剣」から流儀を超えた近代「剣道」への脱皮のため撃剣を通底する統一形の制定が急務だったのである。

大日本帝国剣道形（現日本剣道形）の成立過程については中村民雄氏の『剣道事典—技術と文化の歴史—』（島津書房）に詳細に記述されている。また、同氏の監修により現代語訳として再生復活された高野佐三郎『剣道』（島津書房、平成25年）に収録されている解説・解題にも詳しいので是非ご一読いただきたい。

文部省は、「撃剣及柔術」が明治44年4月1日より中学校正課として施行されたことにともない、同年11月6日から12月9日まで5週間にわたり「武術教授法統一」のための第一回目の講習会を東京高等師範学校で開催した。この時の記録は、渡辺一郎編『近代武道史研究資料IX』（筑波大学）に収録されている。それによれば、講習対象は各府県の師範学校・中学校で撃剣・柔術の担当教員であり、剣道40名、柔道31名が参加。終了後には、講習者に「証明書」が授与されている。この時の講習要目には、教育学概論・体育理論・剣道（柔道）理論・試合（乱取）、形及教授法の4科目が指定され、剣道理論には根岸信五郎が、試合、形及教授法には高野佐三郎と木村敷秀が担当している。

この講習会での課題は教授内容と教授方法の確立であった。柔術については「すでに講道館柔道が柔術界を席卷しており、形の統一や教材の内容については一定の方式が固まって」おり「講道館式の教授方法も確立」していた。しかし撃剣（剣道）では、民間道場、軍隊、警察、各種学校等で指導に携わっていた指導者の流儀に沿って実施され個々別々の感があった。そのような事情にあつて大日本武徳会は「天・地・人」と称せられた三本の形を制定し、講習会にも備えていたのである。しかし、当時高等師範学校校長で講習会の最高責任者でもある嘉納治五郎が「全国の中学校で行う統一形としては、先に武徳会が制定した三本の形は不向きであると異論を挟んだ」のである。嘉納は新たに講習会独自の形を制定することとし、委員会を組織した。講習会講師である根岸信五郎・高野佐三郎・木村敷秀の三名が原案を作成し新たに任命された十名の委員によって協議され武術講習会用の形三本が制定された。その翌年、文部省と武徳会は、「文部省の講習会用に制定された三本を、新たに太刀の形として前三本に位置付け、残り四本を新委員会で作成するという妥協」により、従来の武徳会剣道形と文部省選定剣道形を廃し、新たな「大日本帝国剣道形」を制定したのである。そのような事情があり、この形は「あくまでも流派統合の象徴」として作成されたのである。（注7高野佐三郎『剣道』

鳥津書房、平成25年収録の解説・解題参照)

「大日本帝国剣道形」の制定に深くかかわった高野は、自著『剣道』で以下のように述べる。「」内は現代語訳『剣道』鳥津書房(P90-91)から引用する。「従来の形は、形としてのみ用いられ、試合に応用することができないものが多かったが、この形は、僅か十本に過ぎないが、これを活用すれば何本にも応用することができるであろう。実際の試合に応用することができることを主眼としてこれを制定した。」

ここで読み取れることは、近世剣術の特性であった形稽古(組太刀)が近世後期に防具を着用し竹刀を以て自由に打ち合う「竹刀打ち込み稽古」へと展開し、さらに「竹刀打ち込み稽古」が「試合剣術」へと発展し独自の方法へと価値追求がなされてきたということである。暗に、剣道が、刀による斬突技法から竹刀による打突技法に変化したことを表明していると見ることができるのである。

また、形の機能については、「剣道の形は剣道の技術のうち最も基本的なものを選んで組み立てたもので、これによって姿勢を正確にし、眼を明らかにし、技の癖を去り、太刀筋を正しくし、動作を機敏軽捷にし、打突を正確にし、間合を知り、気位を高め、気合を練るなど、非常に重要なものである」としている。もし形を学ぶことなく「初めから道具を着け互格の試合をして勝負を争うと、姿勢・動作が乱れ、気合・間合を測れず、打突も正確にならないなど、多くの悪癖が生じ、上達もまた遅い」ので「昔は、必ずまず形から入って後に試合に至るのを順序とした」と言うのである。それ故、まずは「基本動作に習熟したら、適宜に形を交えて教授するのがよい」と述べている。

形の実施に際しての留意すべき点については、「十分に真剣対敵の気合を込め、少しの油断もなく、一呼吸といえども気を抜くことなく、剣道の法則に従い確実に練習しなければならない。形で重要なのは単にその動作のみならずその精神であって、気合が充実せず精神が慎重さを欠いては、いかに軽妙に演じたとしてもひとつの舞踊か体操にすぎない」と強調しているのである。これは、お互いが真剣に向き合い、間合いを詰めて勝敗が決する瞬間の重要性を語るものであり、大太刀七本の形の全てに打太刀が打ち出す瞬間を「機を見て」、小太刀では「入り身にならん」という文言で表記されている内容について述べているのである。戦後剣道の復活に際して「日本刀」の観念を払拭することが課題であったこともあり、この剣道形の稽古を控えなければならない事情があったことは以前述べたことである。このことが、戦後剣道の乱れの遠因となっているのかもしれない。

では高野の示した剣道形とはどのようなものであったのか。高野の教え子たちの証言(『教育剣道を培った人々』いなほ書房より抜粋)から想像していただきたい。

()内は高師卒業年度、<>内は卒業年度時の高野の満年齢

○志藤 義孝(昭和9年3月卒)<72歳>

毎回のことながら、必ず高野先生の理合いをもとにした解説のあと、形の練習にはいった。高野先生のお話で印象深く、今でもはっきり覚えていることは、次の2点である。

「形は、あくまでも約束ごとである。打太刀が求められた以外のどこを打ち込もうとも、まちがいはない。仕太刀はどこに打ち込まれようとも、それに対処できなければいけない」、「足の運び方は、そのときどきに応じて、臨機に使わなければいけない。不自然な無理な動きはいけない。形では、気と間合いが大事である。」

授業中、高野先生のお相手をさせられ、残心の左足の出し方が早過ぎ、木刀ですねを何回叩かれたことか、わからない。

西野 悟郎(昭和19年9月卒)<81歳>

○高野佐三郎先生の形を見学する。言いしれぬあるものが心深く入り込む。「形が充分にできなければ姿勢は正しくならない。特に教育者となる諸君は形を重視しなくてはならない」と訓話される。

○佐藤卯吉先生の訓話。「形の修練を積んでいる人の稽古はどこかに品位がある。高野佐三郎先生の稽古に気品・品位があると言われるのもこのためだ。形をやっていない人の稽古はどこか粗野なところがあるものだ。また、中段に構えた右足は大地をふむべし。左足の踵は常に上げるべし。右足先はそのまま地につけるのではなく足先のあたりに意するなり」

5 『剣道』出版の意義

日本体育史の専門家である今村嘉雄は、高野の『剣道』について以下のような極めて適切な評価と内容の説明をしている。簡にして明なのでここに掲げたい。

・・・剣道がその伝統的格闘技としての特性を生かしながら、流派的独善を排し、しかも全く異質的な健康体操への「角を矯めて牛を殺す」ような安易な妥協的改変をいましめ、技法やその学習指導法を、より合理化、客観化することによって、いわゆる近代剣道として再活性化さるべきだと協調していることである。・・・小野派一刀流の正統を伝えながら、高所大所に立って、近代剣道の創出に生涯をかけたのであり、本書によって近代(現代)剣道はスタートしたといっても過言ではあるまい。

さらに本書は、これら近代剣道を正しく国民教育の中に位置づけるべく、特に指導者にとって、不可欠の学習内容を本書第一篇教習五章、第二篇術理六章、第三篇史伝三章にまとめ、最後に付録として「剣道書類解題」を三十六点について試みている。このように本書は、これまでの近代剣道書の総集編であるとともに、その後の剣道並びに剣道研究に、領域と方向とを示したものともいえる。その高邁な識見、円満な人柄、豊富な体験と旺盛な研究心は、求めずして与えられた社会的な地位と、広範な人間関係によって、筆者は柔道界の嘉納治五郎に近い存在となった。(注8 近代剣道名著体系第3巻、昭和60年、同朋舎出版 P419)

高野佐三郎は剣道のために産まれてきたような人物である。中西派一刀流の皆伝者であり秩父で道場を開いていた祖父高野苗正から幼少の頃より一刀流の組太刀(形)を仕込まれ、様々な稽古によって鍛え上げられたと言われている。23歳のとき警視庁に奉職したのを皮切りに。明治21年、満25歳のときに埼玉に戻り、警察、日本体育会、武徳会埼玉支部、埼玉師範、中学校等様々な場所で剣道を教えていた。また、埼玉に戻った明治21年には浦和に明信館を開設、明治32年には九段下に東京明信館を設立し、それまでに県内各所に設立された40ヶ所ほどの支館の本部として、剣道の普及活動に努めていた。そのような広範な活動をしていた高野は1908年(明治41)に東京高師に招かれるのである。そして『剣道』の出版。

『剣道』の「緒言」で高野は、1911年7月(明治44)に学校の正科に加えられるにあたり講師を務め、全国各中学校師範学校剣道教師のために「基本教授法(団体教授法)」を講じた、としている。1913年(大正2)10月には帝国剣道形の講習、さらに1914年(大正3)7月には基本教授法及び形の講習を実施しながら、従来になく新たな視点と方法によって、教授法、術理、歴史など全般的に網羅し、教師や生徒及び剣道に志ある人々に解り易く簡明正確に記述した参考書として世に送ったと述べている。当時74歳だった渋沢栄一が本書の序文を認めている。

文部省が「撃剣・柔術」を「剣道・柔道」と名称変更したのは、「体操指導要目」(現在の指導要領)が改定された1926年(大正15)のこと。これに先がけ嘉納治五郎が「柔道」という名称を唱えたのは1982年(明治15)。そして「剣道」は高野のこの著作によってその名称を世に送り出したといってもよい。

高野は、19世紀の中頃に千葉周作が体系化した「剣術六十八手」をさらに精選し「手法五十種」として剣道技術の体系を示している。それらの技を稽古する意義について、高野は剣道家としての真骨頂ともいふべき、以下のような文章を記している。

曰く、一たび剣を執って立てば、鋭敏周到な注意心をもって、極めて微細な相手の眼睛・姿勢・手脚・剣尖などの変化により乗ずべき機を看破し、速かに応ずべき処置を定め、敏捷かつ確実にこれを実行しなくてはならぬ。このような一連の活動はわれわれの意思活動の模範的形式であり、剣道はわれわれも生活活動の基本を練習するものとだときえ言い切ることができよう。・・・半年の鍛練には半年の効果あり、一年の修行には一年の進境がある。怠らずに勉めれば必ずそれに相当した鍛練の効果を取めることができるであろう。要するに剣道の主眼は、技術又は勝敗の末にあるのではなく、技術の錬磨によって心身を鍛練することに在ることを忘れてはならない。(注9 注7に同じ P37)

そして、剣道の愛好者を多く育てるための指導者としての心得を「剣道は修養法としても娯楽としても甚だ適当であり、心身の鍛錬上の効果もあるので、卒業後も進んで実施したくなるような指導が肝要だ」と述べる。

高野の帝国剣道形の制定と教科書の出版は、まさに幕藩時代の「武術」から近代国家形成を下支えする新たな「武道」へと基軸の変換を担った画期的な事業だったのである。嘉納のいう原理に基づいた客観的・合理的な指導体系を実現したが故に、その精神が富永堅吾、菅原融、佐藤卯吉、中野八十二といった後進にも伝わったのである。

心身の鍛錬の在り方にすんなり入れるのは、「機を看破」する、「打って勝つのではなく勝って打つ」といった技と密接に結びつく微妙な感覚が柔道に比して多い。これをどう考えるか。剣道の特性を考える課題となろう。

6 高野佐三郎の剣道

高野は、若き頃の鉄舟との稽古を振り返り、昭和9年の座談会記事「剣道の奥義を語る」で次のような言葉を残している。

山岡先生に稽古して頂くと、氣で押される、正面を打つて行つても打った氣持がしないとうふのがそれである。却って、『お前はまだ幼稚だぞ、理窟を知らない』といはれてゐるやうで、これが形で負けて心で勝つといふことで、それを誤解して、山岡先生の稽古はボカボカ、ボカボカ初心の者にでも打たれるやうに考へて居る人もあるが、打たれて居る山岡先生の肚では、『そんなことは竹刀棒の盲打、打くらではそんなことが出来るけれども、眞剣ぢや出来ない、眞剣で瞬間に勝負をつける時にはそんなことは出来ない』といふので、今の、形で負けても心ぢや決して負けてゐない。またお前等は幼稚だぞといふ意味なんです。山岡先生などは、本當に長竹刀で錬つて錬つて錬り上げて、心の修行をするために短くしたので、形だけ山岡流を眞似たのとは違ふ。眞に長い竹刀で錬り上げて、禪劍一致した先生ですから、剣道を禪學の上から表して、打つ打たれる、敵もなく我もなく、無我無心の三昧に入った稽古を使つて居られるので、いくら形の上で頑張つても駄目ですね。山岡先生の稽古は柔かいものでした。よく山岡先生の眞似をする人々が、竹刀の重いやつで肩を怒らしてポンポンやつて、それで山岡流と思つて居るが、そんなものではなかつた。長いから錬り上げたのですから、スラリスラリと、私共打てるけれども、打つても打つた氣がしない、一尺位離れて居つても、先生が劍尖をピリッと動かされると、此方はもう突かれたやうな氣がします。（『武道宝鑑』、講談社、昭和9年、P26）

また、『剣道百年』（庄子宗光著、時事通信社、昭和51、P25-26）には高野の若い頃の体験が次の様に語られている。

我々が若い時、一昼夜立ち切りで稽古をしたことがありました。これに合格した者は、奨励のために全国を巡回させるというような目的だったそうです。この時は我々三人（高野氏の他に川崎善三郎、高橋超太郎両氏を指す）を含めて十人ばかり選ばれて、夜の六時から朝の六時までつづけざまに稽古したことがありました。そうすると今の助教というような人たちが我々を叩きつぶそうと、各署から志願して出て来る。そして夜の十二時過ぎになると神経が鈍ってしまうから、道場の真中にでも居ようものなら、忽ち放りつけられる。とにかく時間の過ぎるまで我慢ができれば合格しないというだから、午前二時頃になると実に辛くて止そうと思ふこともあったが、それでも我慢して、竹刀を真直ぐに持って板壁に背をくっつけて立っていると、またやってきて、真中に引出して打ったり突いたりする始末、それでも我慢していると眠くなってくる。まるで鮒が荒波にあったときのようにフラフラになってしまいます。ところが人間の精神というものはえらいもので、署の横に大きな鳥屋があつて、そこの一番鶏が鳴きはじめると、またはじめの元気に戻ります。夜が白々明けて来るとはつきりして来て、今度は先程残酷なことをしてひどい目に合わせた者

を逆に引張り出して、仕返しをするというようなことをやりました。とにかく我々三人は最後まで我慢をしようし、えらい評判になりました。その間にお粥を三度くらい食べて、はばかりに三度くらい行きます。小便は真赤な血のような小便が出ます。それからというもの一週間くらいは元の体に回復しません。高いびきで寝ているが、頭は決して眠っていない。竹刀を持って戦っている夢ばかり見ている。それが一週間くらいぬけないという有様で、その頃が一番辛い修行でした。

また、警視庁での試合について大野熊雄『剣士内藤高治』に次の様に紹介されている。

高野氏との試合 (P56)

氏が牛込の警察署にゐた頃の警視廳の行政区割は六方面に分れ、四谷、牛込新宿は四方面の組合であった関係上、今札幌に居らるゝ富田氏とは屢々(度々)稽古をされた事があった。丁度、時は明治廿三四年頃、警視廳で招魂祭大撃劔會の催があった。その時の最高幹部は上田、逸見、得能、眞貝の諸氏で、格は二級、次は武藤、根岸、兼光、柴田、富山の諸氏が三級、内藤、高野と云ふ處は四級の上であった。然し實力は却って四級上位の者が一番花形であった。

その日、高野佐三郎氏は埼玉縣の代表者として乗り込み、警視廳側は之に對し麹町署の猿田東助氏が立合ふ事になった。猿田氏は東京に於ても早技の名人で對手としては最も好組合せと一同唾をのんで見てゐたが、いよいよ試合となると猿田氏はかねての早技を出す暇もなく、高野氏の體力に壓迫され遂に負けとなった。

そこで警視廳は埼玉縣に負けたと云ふ事になるので、幹部の連中が、相計って今一度高野氏を内藤氏と試合はせる事になった。一合、二合と火の様な立合ひで、觀衆全部が手に汗を握って見てゐたが、遂に勝負は決せず、引分けとなった。これは當時評判の試合であった。(札幌、富田喜三郎氏談、)

武道専門学校の教授となった内藤高治との立ち合い記事である。

7 弟子から見た高野佐三郎像

最後に、高野に教えを受けた弟子達は高野をどのように見ていたのかを記すことにより我々の高野理解を深めたい。(『教育剣道を培った人々』より抜粋)

佐藤 卯吉 (大正8年3月卒) <高野先生満56歳>

恩師高野佐三郎教授は55歳位であったが、剣道の稽古振りは円熟した誠に立派なものであった。強い上に実にうまかった。道場の板間に正座して高野先生の指導せられる稽古振りを見学していると余りのうまさに感激して、深いため息をついて感にたえたものである。高野先生はまれに見る剣道に於ける天分の豊かな方である上に、先生の御若い頃は旧藩時代の有名な剣道家が生き残っていて、それらの先生方に接して激しい修行をすることが出来たのである。

志藤 義孝 (昭和9年3月卒) <72歳>

「あなたがたは、劍豪、大家や試合巧者になるために、ここに入ってきたのではありません。高等師範というところは、中学校の先生を養成するところです。指導者として模範になる技術と、それにとまなう理論(理合い)を正しく身につけるように、努力しなさい」。

これは、昭和5年に、私達が高師に入学して間もなく、主任教授の高野佐三郎先生からいただいた訓辞であった。先生は、このことを折りにふれ、言われていたので、今でも深く肝に銘じている。……

「剣道は、勝って打つものです。君達のように打って勝つようなものは、剣道ではありません。剣道をやると同時に努力しなさい。」と高野先生からしょっちゅう叱られたものです。

当時は、高野先生は70歳、しかも、若い頃の無理な稽古のためにひざを極度に痛められ、太い竹のステッキを松葉杖代わりに、足を引きずって登校されていた。道場では、正座が無理で、片足を投げ出してやっと座られた。

いかに、名人・達人で、昭和の劍聖といわれた先生でも、体力の点では、私達学生とは比較にならない。にもかかわらず、先生に打たれる時は、完全にそっくり返り、面に来る先生の竹刀がはっきりと見えるが、どうすることも出来ずに面を打たれてしまう。圧されて、苦しまぎれに打って出ると返

されて打たれる。電光石火の早業というのは講談でのことであって、先生の竹刀は実に遅かった。勝って打つとは、このことであろう、剣道の本当の速さというのは、このことではなからうか。

佐藤 清 (昭和10年3月卒) <73歳>

道場の広さは、八間に十六間ほどで、正面の床の間の右脇に火鉢が置いてあり、高野先生はいつも火鉢の横にお座り(腰掛)になり、二本の火箸を手前におかれていた。この理由を高野先生は、いついかなる時でも常に身を護り、敵に対して応じるように用心しているのであると仰せられていた。大先生というものは、常に相手に対する間合い、態度を考えていられるものだと感じ入った次第である。・・・

さらに、高野先生は稀に二尺五寸位の竹刀を持って我々と稽古された。この短い竹刀で我々の三尺八・九寸の竹刀に向かって稽古をつけられることが度々であった。人を馬鹿にしていると思ったがさにあらず、こちらへドンドン打ち込んでこられる。むしろ、後へ追いつめられることしばしばで、矢張り間合いの大事なことを教えられた。

湯野 正憲 (昭和14年3月卒) <78歳>

稽古の仕方は、高野、菅原、森田、佐藤、三橋、それと卒業した先輩および4年生、3年生が元立って、1、2年生が懸りの稽古を行った。特別に基本練習や、切返しの練習を或る期間をきってやるということにはなかった。武専や国士館では、入学して一学期間は「切返し」ばかりだということを知った。ここでは、その点は強制されなかったが、個人の持っている特性・個性に応じて、それぞれ先生・先輩から、稽古終了後、挨拶にいくと、親切に、こまやかに注意され、また相談相手にもなってもらえた。高野先生の風格をまのあたりに接し、先生方や先輩が、大先生にかかる様子を見て、まさかあんなことがあるのかと目を疑い、まるで子供扱いのていは、わざとああいうふうにするのかとも疑った。私たちは、高野先生に稽古してもらうことはなかった。先輩達の稽古の様子を拝見するだけだった。

小森園 正雄 (昭和16年12月卒) <79歳>

私は学生の時に、高野佐三郎先生が名誉教授でいらっしゃった。先生がたまに稽古においでになったときに学生はこぞってお願いをした。一步も打ってはいけません。竹刀を動かさない。いわゆる三角矩というのですか、大先生はいつもそういうふうな表現をなさっていました。打っていくところがどこもないから、攻められてジリジリ退がる。道場の羽目板に追いつめられる。そうすると竹刀がスルスルと左手で伸びてきてトントン。はいもう一回、もとへ帰ってもう一回。それでも稽古にならないかという、そうじゃない。たまに無理して打っていいこうとしても、これは全然形にならない。触りもしない。それは先生の剣道は法則性をしっかり身につけていらっしゃるからです。「あなた方の竹刀は何時何分にどこへ来るということが私にはわかる」とはつきりおっしゃる。「私は東京駅の駅長で、下関を出た特急列車のさくらが何番線に何時何分に着きます。だから駅長は30秒前に赤い帽子をかぶってホームに立って列車をお迎えしたらいい。それとあなた方の剣道は一緒だ」と。何時何分ここへ来るから、ああ来た、はい、パンパン。これは、いわゆる目茶苦茶な修練ということではなくて、法則性が身につけて修練の結果からそういう言葉を吐かれたのだということです。

夏迫 丸喜 (昭和16年12月卒) <79歳>

高野先生は常に授業の始まる30分前頃には道場に来られていた。私は当時高師の助教授を仰せつかったもので、何が何でも先生より早く道場に入り先生を迎えなければならなかった。

ある時、ご自分の右足の親指の外側をさわらせて「夏迫さん、ここはカミソリの刃のようでしょう」とおっしゃった。これは、間合いをぬすんで相手に小きざみで察せられずにせまることを常にしていると、このようになるのだと推察しました。また、ある時、「夏迫さん、私のたなごころをさわって見なさいよ」と大きな手をさし出された。さわってみると、自分から「娘の手の手のようでしょう」と笑わされた。そして「タコやマメが出来るうちは、本当ではないのです」とおっしゃった。またある

時、佐藤卯吉先生の剣道について、「気を殺し、剣を殺し、体を殺す」三殺法に則った、理に叶った稽古です。批判する人がいるがとんでもないと言われ、佐藤先生の剣道をほめられたこともありました。他にも剣道の理論についてその奥義を説かれたと思うのですが、何しろこちらがその心境に程遠く理解出来なかったので、その部分については残念ながら書けません。また、こんなこともありました。「夏迫さん、このヂヂが80歳を越えてどんな稽古をしたかよく覚えていて下さい。私は83歳で84年間稽古していますから」と、一寸変に思いましたが、オフクロの腹の中にいるうちからオフクロが道場に出ておられたとのこと、納得しました。先生は80歳を過ぎられた高齢でもいつも続けて学生15、6名に稽古をつけて下さいました。私（夏迫）が稽古をつけていただいた時打ち込んでいけないのを無視して打っていくと軽く受け流され、また、「先で」応ぜられました。全くスピードは感じませんでした。また、稽古の途中、上段をとりなさいとおっしゃり、上段をとってはみるが打ち下ろすことはできない。先生はゆっくりと「突」を出され、触れてもいないのに強い衝撃を受けました。また、目をつぶって打ち下ろすと「スルッ」摺られ、右胴をゆっくり「カチャッ」と打たれます。そのうち息が上がり「はい」それまででした。稽古の前後は殆ど三橋先生が掛けられたが、2、3分したら「ヤー」切り返しで終わり。三橋先生たちのような大先生でも手も足も出ない様子を見て、どこまで剣道は奥があるのだろうか、ガツカリすることもありました。また、先生は私共みたいな孫の子のような若者に決して呼びすてでなく「さん」づけでした。恐縮の至りでした。やっぱり剣道の神様でした。

荒木 英之（昭和16年12月卒）＜79歳＞

剣道主任教授高野先生は日本剣道界の神様の存在であり、その稽古姿の美しさ、精妙な打突と軽妙な足さばきには感心するばかりであった。ところが先生は月に二、三度しか見えなかったので、来られた日は大変だった。先生の姿をチラッとでも見たら、一刻を争って列に並ばないと間に合わない。それは先着20名位しか稽古をつけてもらえなかったためである。先生の構えは「三角矩の構え」で、剣先を少し中心より右へズラした鋭三角形の構えであった。またその軽妙な足さばきについては、次のような教示を受けた。「お前達の足づかいのように、ドタン、ドタンと板を踏み鳴らすようなやり方ではいけない。もっと音を立てないスムーズな足づかいが必要である。それには歌舞伎を観に行け。俳優の顔や衣装に幻惑されるな。足づかいだけを注視しろ」といわれたので、実際に歌舞伎を観に行き、「弁慶の六歩を踏む」足さばきの見事さに感心したことを覚えている。またある時学生と握手されたことがあるが、その偉大な腕に似合わず、手の内が女性の肌のように柔らかで、我々の豆だらけの堅い手とは比べものにならず驚いたことがある。先生は身を以て竹刀を持つ手の内の大切さを教えられたわけである。さらに先生の講話は次元の高いものが多かったが、口癖のように「生きた剣道」それは剣道を道場だけのたたき合いに終わらせず、剣道の精神を教育は勿論のこと、あらゆる面に生かせということであった。

西野 悟郎（昭和19年9月卒）＜81歳＞

高野佐三郎先生の訓話「つばぜり合いの時、何もしないで分かれてしまう。絶対にこんなことでは駄目だ。つばぜり合いこそ死ぬか生きるかの分岐点だ。つばぜり合いの状態を見れば剣の強弱がわかる。つばぜり合いの時どのようにして勝ちを占めるかと申せば、相手の竹刀をおさえて面を打つ、或いは相手の力を利用して右にかわして面を打つ、或いは右胴を打て」と。

高野佐三郎先生より二等辺三角形—三角矩—の構えの指導を受ける。三角矩は、眼・腹・剣先の三つを一つとなし敵に立ち向かう“打とうともわれも思わず打たじともわれも思はぬ神妙の剣”

高野佐三郎先生より訓話。「試合中に面紐の結びめのとけた者が7名もいた。これは本人の責任ではなく指導者の責任だ。昔いざ鎌倉というときは武士は常に命を捨てる覚悟である。従って紐などは容易にとけないように強く結ぶように心がけたものだ。胴の紐がとけている者は心に弛みがある。晴眼の足の踏み方は八文字で天と地である。即ち右足が地で左足が天である。爪先に力が入っていない者は心が弛んでいる証拠である。諸君は指導者になるのだからこのような詳細な点にも注意しなくてはならない。」

高野佐三郎先生より訓話。「稽古中に口を開いている者がいる。また中段に構えた場合、左膝が曲がっている者がいる。これは良いように考えられているが、左膝が曲がれば一番大事な腹の力が抜けるのだ」ときびしく言われた。

高野佐三郎先生の稽古を見学する。昨年も4年生数名を相手にされたが今回がこれで二度目の見学である。佐藤卯吉先生より指名された小池・今井・新岡以外数名の先輩方が必死に打ち込んで行く。高野先生は80歳の高齢にも拘わらず先ずその足さばきの完璧なのに驚嘆した。先生は時には無構えとなる、打ってくる竹刀を払って逆胴、また抜き胴、それに押さえ小手の早いこと。まるで芝居の殺陣「たちまわり」をやっているような剣さばきである。先生には相手の打ってくるのが無意識に直感的に察知されるのであろう。

“うつるとも月も思わずうつすとも水も思はぬ広沢の池”

高野佐三郎先生からの訓話。「三角矩の構えについて、戦いにおいて準備が充分でなければ有利な戦いはできない。それと同時に自己の構えに自信がなければ、敵を恐れ心が迷うのである。この三角矩の構えはこのような迷いやこだわる心がないのであるから、一日も早く自得できるよう稽古しなくてはならない。」

今日は高野佐三郎先生が稽古をされた。先生は既に82歳のご高齢である。3年生から数名が選ばれ私もその中に入ることができた。ただ無心で稽古を願う。最初の数合は相中段で、そのあとは上段をとれと指示される。稽古の時間は3分足らずであったが断片的なことが記憶に残っている。先ず相中段では先生がゆるりゆるりと間に入ってくる。私は一度退るがあとは辛抱する、その瞬間小手を打たれた。竹刀のくるのが眼に見えるがなんとも出来ない。軽い小手打ちであったが「ずぼっ」と心に響く。次は上段である。私は上段をとるのは生まれて始めて態（さま）にならない。打てずにいると片手突き、面に打ち込めば軽く左右胴を返された。先生の稽古を見学しての感想、間合・足さばき即ち間合と足の盗み方、先生のゆるりゆるりと間に入ってくるの剣さばき、特に左右胴の返しわざと片手突きの妙技、二年前4年生数名を相手に稽古された内容と全く同じであった。稽古後、高野佐三郎先生の訓話、「上段で稽古する必要がある。その理由は単に打つことのみのためでなく、上段の構えは勇猛なる攻撃と気魄を現したものである。上段でも気剣体一致の稽古をするように。また稽古をする場合、一人対五人・一人対十人を相手する位の気概が必要だ。」

おわりに

現在の中学校武道必修化が実施された2012年（平成24）は日本剣道形が制定された1912年から丁度100年目。それから11年が過ぎようとしている今、私達剣道指導に携わる者にとっては、先にみた一世代前の剣道人の言葉を咀嚼しながら、「伝統的な行動の仕方」「武道の特性や成り立ち」「伝統的な考え方」を改めて自分たちの言葉で語らなければなりません。

この度の話が、教育剣道の生みの親・高野佐三郎の述べる「剣道形」の意義や指導者としての剣道修行の在り方を問い直す契機となれば幸いです。（以上）